
その出会いこそが始まりだった

† 白夜叉 †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その出会いこそが始まりだった

【Nコード】

N2588J

【作者名】

十白夜叉十

【あらすじ】

攘夷戦争終結後、江戸に上京してきた銀時。
しかし、知り合い等もおらず、雪が降り凍える寒さの中、一人墓石に凭れかかっていた。

原作とは異なっております。

第一訓「出会い」（前書き）

知ってる人はすみません（><）

第一訓「出会い」

……それは雪が降った日だった。

ある墓場
…

ザッサ…

砂利を踏む音が、辺りに響きわたっていた。

一つの墓の前に止まる。

それは一人の老婆だった。

饅頭を供え、手を合わせた後、少し墓を眺めていた。

「おーいババー」

「！」

突然、墓から声が聞こえた。

低い、歌うならアルト。

「それ饅頭か？」

「食べてい？腹へって死にそうなんだ。」

ソイツは、墓の後ろにもたれかかり、座っていた。

「こりゃ私の旦那のもんだ。
旦那に聞きな。」

すると、ソイツは間髪いれず、饅頭を皿ごと取ると、食いはじめた。

ソイツが、食べ終わるのを見計らって、話し掛けた。

「何つつてた？私の旦那。」

男は立ち上がり、言った。

「死人が口聞か。

だから一方的に約束してもらったわ。」

「約束？」

男が、振り返った。

「この恩は忘れねえ。

あんたのバーさん老い先短いだろーが……」

男は、一旦区切ると今度は少し声色を変えていった。

「あんたの代わりに俺が護ってやる……って。」

男は、身体中傷まみれで、血だらけだった。

「……フッフ……ハハハ！面白いねえ。」

きな、手当てしてやるよ」

これが、この男との出会いだった。

「アンタ痩せ過ぎじゃないかい？」

「これが普通何じゃねーの？」

スナックお登勢の店で、男を手当てしながら呟いた。

「はい、終わり！」

ペシッと体を叩くと、「あだっ！」と呻き声をあげ、それに思わず苦笑いする。

「でもアンタ、そりゃほとんど刀傷だろ？」

「どういうことだい？」

その質問の答えを迷っているのか、沈黙が流れたが男はやっと口を開いた。

「戦」

一つの単語をぽつりと呟き、それ以降は黙ってしまった。

その空気に耐えられなくなったのか、老婆の方から口を開く。

「まあ、話したくないなら聞く気はないよ。」

その前に、あんたの名前聞いところかね。」

その言葉に男は老婆を見、言った。

「銀時。坂田銀時。」

男の銀髪からの由来なのか、ふうんそうなのかい。と返事をするとき、老婆も言う。

「私やお登勢。源氏名だが、ババーでも好きに呼びな。」

「おう。ババア」

早速かい。とタバコを取り出し吹かすと、銀時は、ああ。と言い、少し笑った。

「んで、すむトコは無いのかい？」

「平たく言やあない。」

平たくも何も無いんだろ？と言うと、いざとなれば野宿でも何でもしてやらあ。と鼻で笑った。

「そんなんじゃ凍え死んじまうよ。」

何せ、こんな季節だ。」

「まーな」

銀時はカウンターに頬杖をつき、言った。

「家の二階開いてんだ。」

使うかい？」

と、言えば。

マジでか！ババア！！と目を輝かせた。

「ただし、家賃はしっかり払って貰うよ？」

と、舞い上がっている銀時に一押しすると、ケチくせーなババア。と言った。

「それならその辺で凍え死ぬかい？」

「はいはい。ま、住まして貰う身だし、お受けいただきますよー…」

と、ひらひらと手を振れば、

「そうこなくっちゃね。」

安心しな、ご飯ぐらいは出してやるよ。」

「おー、そりゃありがてーぜ。」

世話になるな。」

「手間かけさせないでおくれよ。」

「おう」

第一訓「出会い」（後書き）

とりあえず、第一訓、終了です。
次回をお楽しみ下さい。

第二訓「万事屋」(前書き)

すいません (><)

なんかすいません (><)

第二訓「万事屋」

……

「……アンタホントに男かい？」

「何？俺を女だと言いたいのか？」

どう見たら俺が女に見えるんだ？

老い先短いどころかもう逝っちまってんじゃねーの？
こりゃ護るも何も手遅れですってか。」

「何を一人で長々と喋ってんだい。」

私やそういう事を言ってんじやないのさ。

これだよコレ。」

お登勢が差した物は、カウンターに置かれた銀時の朝食だった。

「は？ご飯が何？」

……え！？まさかご飯が女に？

オイオイもうヤベーな。」

「二階から追い出してやるつか!?!」

…

「って、そうじゃ無くてね、アンタ、何でこんなに残してるんだい?」

確かに朝食は、茶碗に盛ってあつた白米と、魚の焼き魚、いんげんの煮物がだったのだが、

白米は半分しか減っておらず、魚と言えば、腹に少し穴が開いたぐらい。

いんげんの煮物は、ほとんど減っていなかった。

「もう、腹一杯」

その声と同時に、箸がピシッと置かれ、すぐに水が淹れられているコップにてをかけ、

飲み干すと、手を合わせた。

「」馳走さん」

……

明らかに少食どころではない。

傷の手当てをしている時だって思っていた。

筋肉などはしっかりとついていて、たくましかったが、

普通と比べれば、痩せ過ぎだ。

それに、この少食とならば、当たり前。

「もっと食べな。」

「え？いや、腹一杯なの」

「いいから食べな。」

「一杯食べて、太りな」

「えー、腹が二重とか嫌だぜ俺え」

「いいから。」

無理矢理でも、残りのおかずを食べさせる必要がある。

銀時は、色々愚痴っていたが、何とか食べさせる。

箸のペースがゆっくりだ。

それほど、腹が一杯なのだろうか。

「ババア、水くんね？」

ゆっくりいんげんを口に運んだ後、箸を口に加えたまま言った。

それに従い、水をコップに注ぐと、銀時へ手渡した。

「サンキューババア」

手渡した水を、左手に持ち、右手では猛スピードでいんげんが口に運ばれていた。

え？と言う顔をした。

、どうやら口に入れているだけで、食べてはいないようだ。

「何してんだいアンタ？」

「……………」

無言で箸をばってん（×）にし、「今は無理」とでも伝える様な目で見た。

そして、一通りいんげんを入れ終えたかと思うと、今度は水をかぶ

飲み？一気飲み？しだした。

「……………」

ただそれを無言で見ろしかない。

「ぶはっ……………あゝ…」

ゲフっとしても言いそうな息を吐くと、問い掛けた。

「アンタ何してんだい…？」

さっきの疑問だ。

「あゝ…、流し込んだだけ」

素っ気なく答えると、もう一杯。とても言う風にコップを差し出さ

れた。

また、受け取り水を注ぐと、銀時に手渡した。

また、同じ言葉を吐くと、置いた。

「……………」

魚の向かっていた箸が、唐突に止まった。

どうしたんだい？と聞くと、

「…いやあよ、家賃つつつても、金ねーなあと思って」

うーんとうなりを上げた。

「働いて貯めりゃ良いじゃないか、」

当たり前。

「俺よ、何か一つの物事に執着してやんの大の苦手だし、…あーどーしよ」

箸を持った手で頭をかいた。

「アンタねえ……我慢つてもんを覚えな……」

「はぁ……あ、」

ため息をついたかと思うと、今度は思いついたかのように声を上げた。

「何でも屋ってのはどーよ？」

……

「……要するに、……何でもするってことかい？」

「おっよ」

口端を釣り上げて笑った。

「……、アンタの事を何だかんだ言う気はないよ。

自分で決めたことなら、まずはやってみることだね。」

と、言いタバコを取出し吹かすと、銀時は、っし、決まり！と叫び何やらブツブツと言いだめた。

いや、ご飯を食え。

そう言うつもりだったが、まあ、急ぐコトも無いだろうと思い、様子を見ていた。

「《何でも屋銀ちゃん》ってのはどうだ？」

植え付けているのか、質問しているのか、よくわからなかったが、とりあえず良いんじゃないかい？答える。

「そうだろ？」

ん？、いや、待て待て。

なーんかしっくりこねーなあ……」

そこまで悩む事なのか？

等と疑問を浮かべつつも眺める。

「そうだ！《万事屋銀ちゃん》ってのは！？」

「何で”万事屋”なんだい？”万屋”でいいじゃないか」

タバコの灰を灰皿に落としながら問い掛けた。

「なーんつつたら良いのかな、

なんかよ、”万屋”だけだったら……アレじゃん？
ヤバイ仕事をする感じで絞られるから

”事”を入れる事で違う感じに何じゃん？わかる？

あ、わかんない？

大丈夫。俺もわからねえ」

何だよ。

「二階で開くのかい？」

「そこしかねーしょ」

「ま、つべこべにゃ言わないよ。

好きに頑張んな。」

「了解」

手をひらひらと振った後、やっと魚に箸が動いた。

これがこの男、《万事屋銀ちゃん》と言う店の始まりだった。

第三訓「辻斬り」(前書き)

ひゃっほーい！

第三訓「辻斬り」

《現場から中継でお送りします。

現場の花野アナ？花野アナあ！

「はい。こちらが最近、近々多発している辻斬りのあった現場です。

今回で、5人目だそうです。

犯人は未だ捕まっておらず、武装警察真選組も、捜査に協力の発言を申し上げました。

犯人の容貌は、身長が168cm、全体が黒で覆い隠されている、と発言しています。」》

テレビの音が、部屋に響いていた。

その部屋のソファ―に銀時。

「……………辻斬り…か。」

江戸ってのは物騒なこつてー。」

万事屋開業の為の準備はもう終わっている。

そして、腰には木刀の名は《洞爺湖》。

たまたま、通販で売っていたので、下のババアに金を借りて、買った次第である。

…

そして暇なのでテレビを点けてみれば、この事件である。

「……………何の関係もなく…

ただ、…無差別に殺す

命の重さも知らないで…

簡単に奪ってゆく。」

チッ……

外道が。

さっきので気分が悪くなったため、外を散歩することにした。

十

「あらら……曇ってら」

万事屋の玄関を出、空を見上げると、曇天の空だった。

傘は……まあいいか。と思い、腰に木刀だけ差して階段を降りた。

「……その辺見て回るか……。」

宛てもなく、フラフラと歩き始めた。

……

……え？どうしよう。

え？マジでどうしよう。

付いてきてるよね？何か俺付けられてるよね？

後ろから気配と同時に殺気ブンブンだしよお…

《これで5人目だそうです。》

突然、頭に流れ込んだ声。

さっきみたテレビのアナウンサーの声。

5人目。

辻斬りの奪った命の数。

「……………」

その途端、体から殺気が放たれた。

そして、人気のない場所へ。

こついつところだったら、…やりやすいんだろ？

辻斬りのヤローさん？

+

「身長が168cm…低いですね？

おまけに黒たあ…

結構目立つと思うんですけどね？俺は。」

「それでも捕まらないとはな。
しかも5人目だろ？

俺たちも嘗められたもんだぜ」

ふう…と黒髪の男はタバコの煙を吐き出した。

「それでも捕まえられてないんですぜ？

ちゃんと仕事やれよ土方コノヤロ―」

「あんだとコラ！！その言葉も丸々お前にも降り掛かるぞ？」

「ええ？俺なんか言いましたかイ？」

「てんめーえ……！！」

黒髪の男は額に青筋をつくり、栗色の髪の青年と言い合いをしていた。

何と大人気ない姿である。

この男達こそ、武装警察”真選組”。

辻斬りの件で捜査にかりだされたまでである。

…

「結構人気のない場所来ましたね
ま、そういう所に出やすいんでさア」

「出るとは限らないがな」

すると、

ザ、ザ、ザ、

足音。

この音からするとかなり小柄だろうか、

足音のする方へと視線を送りつつ、一応隠れる事に。

すぐ近くの路地裏へと身を隠した。

……銀……？

来たのは、銀髪の男だった。

身長は黒髪の男と同じ位だろう。

小柄だろうかと思ったのは、……違ったようだ。

「!!」

銀髪の後ろに、黒い男を見た。

「アイツって!!」

「間違いねえ！辻斬りのヤローだ！

あの銀髪……狙われてる……！」

そう思った時、銀髪の男は、後ろに振り返り、黒い男を見た。

「！」

「！！！」

あの銀髪……気付いて……

真選組達と同様、黒い男も驚いていた。

「てめーだろ

最近の辻斬りはよお……

そんなに人を殺して楽しいか？

そんでもって……」

銀髪の男は、一旦言葉を区切った後、また、今度はより低く、言った。

「今度はこの俺を殺すか」

背筋が逆立つほど冷たく、殺気の混じった言葉だった。

黒い男……いわゆる、辻斬りは、刀を鞘から抜くと、構えた。

やりあつつもりらしい。

「ヤバイぞあの銀髪……!!」

「どうします?」

2人が相談していたのだが、その途中に辻斬りが動いた。

銀髪の男は腰にあった木刀を、ゆっくり引き抜くと、辻斬りに視線を向けた。

構える様子はない。

「は？何してんのアイツ！！？？
構えろよ！殺されるぞ！

「

なら、助けに行けばいい話なのだが、どうも銀髪の男が気になり、できなかった。

辻斬りは、銀髪の男まで駆けると、縦に振り上げた。

ヒュッ………！

空振りの音。

「どこ振ってんだ？」

背後から男の声。

辻斬りは、途端に反応し、回りながら刀を横に斬る。

しかし、肉を切り裂く感触がない、音がない、血がない。

「こつちこつち」

持て余すように声をかける。

また背後から。

辻斬りは、とりあえず、銀髪の方から距離をとった。

「何もんだ！」

辻斬りが銀髪に向かい、叫んだ。

「……………」

「……………辻斬りヤローに…」

名乗る名なんてねーよ
「」

「！！」
「」

銀髪は、地を蹴り上げ、一歩で辻斬りへたどり着く。

「うわぁ！！」
「」

咄嗟に辻斬りは防御の構えをとる。

しかし、無駄だった。

バキンッ……！！

刀は、重い衝撃を与えた後、砕け散った。

「な……あ！！??？」

「……………もう戻らねえ。」

男が、一歩、歩み寄る。

それに、辻斬りは、一歩、後づさる。

「……………もう帰って来ねえ。」

また前に一歩。

後に一歩。

「……………もう……………」

殺気に満ちた顔が、また一層、険しくなった。

「……………同じ暖かさは…

得られねーんだ!!」

ガキイイ！！！！

辻斬りを、木刀で殴り飛ばした。

辻斬りは、何メートルとふっ飛ぶ。

「……………」が……」

辻斬りは、体を激しく打ったため、動かすことは出来なかった。

真選組は、ただ茫然と見ていた。

「なんで殺す？」

銀髪が辻斬りに問い掛けた。

「……は、…なんで…殺す………っだぁ…？」

途切れ途切れに、言葉を発する。

「たまらねえん…だよ…」

命が……魂が…、消えるところ………は

ハハハハ…！！！！

と、不気味に笑い始める。

「……………れ」

「あ……？」

「黙れってんだよ

腐れ外道。」

ぴしゃりと言い放った。

「てめーには命の重さが分かるか？」

俺だって、お前だってそうだ

人は、神さんが貰った大事な命なんだ。

それは、誰も奪っちゃいけない

魂だってな、1人1人違う。

誰も奪っちゃいけない大事なもんだ

お前に殺された奴だって、まだまだ、ちゃんとした人生があったかも知れない

世の中には……

生きたくても、生きられねえ奴だっていんだ。

何もできずに、死んじまう奴だっていんだ。

そんな奴等がいるってのに、てめーは生きているのに、

人の命を……魂を、簡単に踏みにじった」

辻斬りのもとに歩み寄ると、襟首を持ち上げた。

「その罪……一生でめーで償いな」

そして、投げた。

ある路地裏へ。

「っおい！？え！？投げやがった！！
そ、総悟お！！」

「辻斬りのヤロー投げた。」

「え？こつち来るんだけど」

辻斬りの体は、真っ直ぐ真選組の身を隠していた路地裏に投げられた。

「……………」

銀髪の男は、無言でその光景を見る。

そして、木刀を腰に納めると、真選組に背を向け、歩きだした。
帰るつもりらしい。

「総悟！！コイツ屯所に」

「自分でやれよ」

「お前がやれエエエ！」

…

ザ、ザ、ザ、ザ。

「……………」

立ち去ろうとしていた銀髪の男は、立ち止まり、また振り返った。

「！」

それに、黒髪の男と、栗毛の青年は反応する。

「……………そいつ、薬やってんぞ」

ただ一言言つと、また歩きだした。

すぐ、近くにかりだされていた監察、偵察の山崎を呼び、付けさせ
たのだが、

見事に振り払われたらしい。

「んなんだよ…あの銀髪…」

銀髪とはとても珍しいからかもしれないが、やけに頭に残った。

あの、紅い、燃えるような殺気混じりの目は…

何の意味があつたのだろうか。

言えば、人殺しは嫌いらしい（当たり前だが）

それに、あの剣。

何者なんだろうか。

「一つ分かってるのは、《ただ者》じゃねえって事くらいですかね。辻斬りを意図も簡単に倒した……気になりますア」

それは俺も同じ事だ。

……ポツ……

空は、夕立を迎えようとしていた。

「……魂……か……」

銀時は、天を仰ぎ見ると、ポツリと呟いた。

本当は、俺が…言える立場じゃねーのにな…

「何十人、何百人、何千人との命を奪っている俺に…

」

あえて、過去形ではなく、現在進行形で表す。

何故かって？

命はもう、戻りはしないからさ。

もう過去だからと言って、綺麗さっぱり無くなるわけでもない。

苦しみは、死ぬまで俺を責め続けるんだ。

第三訓「辻斬り」(後書き)

きゃっほーい！

第四訓「攘夷志士」（前書き）

できた！更新できた！

奇跡だ！

第四訓「攘夷志士」

猫探し。

それが万事屋での最初の初仕事だった。

「どうせならもっと、何かパーと、した仕事良かったよな、うん。」

1人頷きながら受話器をチンツと戻すと、寝巻から流水模様の着物に着替え、

木刀を腰に差すと、黒いブーツを履き、万事屋を出た。

「えーと、黒い猫で…目がグリーンアイ…
首輪には鈴……。」

長くなりそうだなと内心想いつつ、猫の居そうな路地裏へと足を進める。

「暗いな……、ま。大丈夫だろ」

と、中に入った。

ゴツ……ドガシヤア！

「……ってえ……マジか……」

何で大丈夫と発した途端にこんな仕打ち……」

何かに詰ま付いて、周りのゴミ箱等と一緒にすっコロンでしまった。

「いたた……何なんだよ」

足に詰ま付いた出あろう丸い球体を、手に取った。

4

えーと
.....

5

.....」

シ
シ
シ
シ
シ

0000
|6000|

この数字は何？

3

あり、残り3秒切った

2

1

0

ヒュアッ！！

俺の反射神経が、役に立ったみたいだ。

ドガアアアアアン！！！！

パラパラ……

えーと……咄嗟に身の危険を感じて空に投げたものの……

空には真っ黒な黒煙。

間違いない。爆弾だ。

だってさ、カウントダウンが……

ま、いいか。

とりあえず、ずっとここにいれば、警察やら一杯来るのは予想できてる。

俺は足早にその場を去ることに。

すると、

「あっちだ！ 追え！」

「逃がすなああ！！」

捕らえる！」

近くからこんな叫び声が聞こえた。

「何だ何だあ………？」

どうやら、何かを捕まえようとしているらしい。

もつとも、俺には全く関係無いのだが、

爆弾の事を聞かれると疑われるのが目に見えている。

身を隠すのが打って付け。　　ってな。

屋根へ飛び立つと、上からなので、歌舞伎町がよく見える。

しかし、さっきの爆弾での黒煙がまだ残っているのか、焦げ臭く、
息苦しかった。

まあ、状況確認として、さっきの叫び声の人物を捜すことにした。

.....

.....アイツ等か.....

黒服の団体が目に入った。

.....そういえば.....

前の辻斬りの件の時...同じ黒服の男がいたな...

黒髪の奴と栗毛の奴...

警察かなんかだろう。

いかにもな感じだったし...

って事は、あの黒服の団体も同類な訳で、.....。

どうしよう。俺やバくない？

「攘夷志士を追え！」

「見逃すな！」

攘夷志士？

.....。

なら.....その攘夷志士と...俺は同類な訳だ。

ここにうじうじいても仕方がない。

とりあえずその攘夷志士とやらを捜す。

「あの言い方からすると...近くには居るみてーだな」

独り言を呟きながら屋根を渡る。

「.....、.....。」

発見。

ゴミ箱に隠れ、身を隠している。

ま、上から見ちゃあ…バレバレなのだが。

その攘夷志士のほぼ真上に移動し、一気に飛び降りた。

音もなくスタツと着地すると、その攘夷志士は俺の存在に気付き、刀に手をかけた。

「安心しろよ

………来い、身を隠したいんだろ？」

初対面の男に向かって安心しろというはおかしな話だが。

男は柄にかけた手を、ゆっくり落とした。

それを見届けると、歩きだす。

後ろから気配がするからには、付いてきているのだろう。

十

「安心しろよ

……身を隠したいんだろ？」

いきなり真上から現れ、声をかけた相手には、見覚えがあった。

微かに差し込む光で、髪は銀色に光っていた。

そして、俺に向けられている紅い目。
深みのある色だ。

そして低く、今までずっと耳にしていたであろうこの声。

銀髪の、見覚えがある男は、突然歩き出したので、慌てて後を
付いていった。

すると、少し薄暗い場所にたどり着く。

「ここなら大丈夫だろ
あんまり人来ねーんだ。

じゃな、精々捕まらぬように」

銀髪の男は、手を挙げ、ひらひらと振りまた歩きだした。

その時俺は、口を開かずにはいらなかった。

「銀時……か？」

第四訓「攘夷志士」（後書き）

さあ、誰でしょうね？

第五訓「再会」(前書き)

ヒヤッホオオオイ！

宿題終わったぜコノヤロー！！

15%だったのが50%まで出来たんだぜ！？

1日でだぜ？！

え？他の50%はどうしたのかって？

……そりゃあ……その

アレだよ。

第五訓「再会」

その言葉を発せられた瞬間、銀髪……、いや。

銀時が立ち止まった。

ゆっくりとこちらに振り返った。

「……てめーは……」

ヅ、ラ……?」

何時もと変わらぬニックネームで呼ぶ彼の姿を見、
懐かしさと、今ここに居ると言つ実感が溢れてきた。

「ツラじゃない……」

桂だ」

このやりとり出さえ、もう訪れることがないだろうと思っていた。

そう、この攘夷志士とは、銀時とかつての盟友、

桂 小太郎だった。

……

「久しぶりに会ったかと思えば……」

攘夷志士だのなんだのくだらねーことしてたの」

近くの段差に2人は座っていた。

「それはこっちのセリフだ。

戦が終わると共に、姿を消して

…万事屋などと、くだらないことをしおって…」

ふう、つとため息をついた。

銀時はただ前をボーと見ながら会話する。

「俺は自由気ままな奴だから…こんなんでいいんだよ。」

……相変わらず…ってところだろうか。

「……銀時、…攘夷をする気はもう無いと？」

「……………」

質問には答えず、ただ前を見る。

「……………もう一度、俺と一緒に来ないか？」

攘夷戦争後期、《白夜叉》と怖れられたほどのお前だ。
お前が来れば、この江戸にいる天人だって、
あの忌まわしきターミナルだって、
潰すのは簡単だろう？」

恐らく、来てくれるだろう、お前なら。

その思いを、心に秘めていた。

「断る」

予想外な言葉が俺の耳に届いた。

その言葉に、銀時へ向く。

「何故だ銀時!？」

お前は元々こつちだった筈だ!!」

「…………俺は」

ずっと前に向けられていた視線が俺に向く。

「この国のために戦った覚えはねえ。」

「幕府のためなんざに戦った覚えはねえ。」

「そもそも…………」

「復讐のために戦った覚えは……」

「一つ足りともねえ。」

「……………ッ!」

その言葉が、やけに新鮮に聞こえた。

《復讐》

そのまま呆然としていると、銀時が立ち上がった。

「じゃな。さっさと捕まっちゃまえよバカ。」

手をひらひらと振り去ってしまった。

「……………」

復讐のために戦った覚えはない……………か

はあ……………」

やはり変わってはいないのか…。

……………」

『何故だ銀時！？』

お前は元々こつちだった筈だ！！』

……そうだ。

俺は…そっちの筈だった。

だが、今と昔の攘夷戦争とは違うんだよ。

目的が。

お前達は、今と同じ思いだったのかもしれない。

《天人潰す、消す、殺す》

……

俺は違う。

天人を潰すために戦ったんじゃない。

ましてや、…《先生》の復讐のために戦ったんじゃない。

あいつらを……仲間を……

護るために戦った。

俺達侍の剣は、人を斬るために使うんじゃないんだよ。

自分を、己を、

魂を、護るために使った。

第五訓「再会」(後書き)

アレだよオオオ!!!!

わかんたろお!!?

ああ!!?わかんねーだあ?!

空気読m……字読めコノヤロー!!!

あーあー!そうです!白紙です!!

何か問題でも!!?!

第六訓「真選組」(前書き)

こーっんにーっちわーっ!!

お久しぶりぶりですう(・・・)

では続きをどっぞっ!

第六訓「真選組」

ある朝、武装警察真選組の朝は、騒がしい限りである。

ドツカアアアン！！

「総悟オオオオ！！！」

お決まりの爆音と、真選組副局長 土方 十四郎の叫び声と、
叫ばれている名前の主、真選組一番隊隊長 沖田 総悟の仕業？で
あるのだ。

「相変わらず騒がしいな。毎度毎度、飽きずに。
ハッハッハッ！」

そして、その様子を楽しそうに眺める真選組局長 近藤 勲。

「いやいや、止めましょうよ！！
屯所が大変な事になりますよっ！！！」

それにすかさずツツコミを入れる真選組隊士 監察役 山崎 退。

「死ねエエエエ土方ア！！」

「お前が死ねエエエエ！！」

「俺は総悟に起こしに行かせただけなんだかな。」

「いやいや、ダメでしょ！！？
起こしに行かせる事態ダメでしょ！！？」

：

食堂

ブチュウ
：

カツ丼にマヨネーズをぶっかける土方。

「おえ……」

隣に居る隊士は、一目散に去る。

「土方さん、いい加減にやめたらどうなんですかイ」

「何をだ」

プスッ
プスッ

マヨネーズをかけ切ると、フタを閉め、割り箸を割る

「その犬の餌をでさア

只でさえ吐きそうなのに、朝から食ったア嫌がらせですかイ」

「バカヤロー犬の餌じゃねえ。
カツ丼土方スペシャルだ」

「はあ……」

総悟はため息を吐き出す。

「所で総悟。」

「何でイ」

「あの件はどうなった？」

「ああ、辻斬りの件ですかイ？
ありゃあ間違いなく辻斬りでしたぜ

容姿もそのまま。

それと……………」

言葉を止める総悟に、土方は顔を向けた。

「何だ？」

「……………」あの銀髪が言ってた通り、薬をやってました」

「！」

薬……………」

『そいつ、薬やってんぞ』

あの時の言葉が頭をよぎる。

「銀髪……………」か。」

+

「 つよし、飯も食った事だし…見回りにでも行くか。
行くぞ総悟。」

「ハイハイ」

軽く返事をし、土方に付いていった。

…

「辻斬りがいなくなるだけでこんな平和何ですねィ？」

「そうだな。」

「仕事も減って楽っちゃあ楽ですがね。」

「てめーは何にもしてねえだろおが!!」

どっちかつつーと昼寝がお前の仕事だろ」

よく分からない会話をしながら（恐らく辻斬りから仕事の話に変わったんだろう）、

見回りをするため江戸を歩く。

確かに…平和なもんだな……。

周りを見回しながらふと思ってしまった。

「あつ、コラ！待ちやがれエ!!
うおっ」

突然叫び声が。

それと同時に黒い猫が路地裏から飛び出してきた。

目がグリーンアイだ、さぞ珍しい猫なんだろう。

と、後を追うように猫に連れて男が飛び出してきた。

「……………アイツは……………」

「オラ！！捕まえたぞ。
観念しやがれ

……………んあ？」

こちらに気付いたようだ。

猫を片手にこちらに振り返った。

その男は、銀色の髪を風に遊ばされながら紅い目が俺たちを捕えた。

『……………そいつ、薬やってんぞ』

あの辻斬りの件の男だった。

「総悟…。」

「分かってまさア…。」

「え？何？」

意味が分からないかの様な顔をし、子首を傾げる。

コイツには聞きたい事が山ほど有るんだよ。

いや、…山ほどはないか。

「お前、ちょっと来い」

土方が男に話し掛けた。

「はあ？誰スかアンタ等」

「！？」

な、たった数日で人の事……忘れやがった？！

「アンタが、辻斬り倒したんじゃないですかイ」

まるで何も無いかの様に平然と聞く総悟。

「辻斬り？」

その言葉に、男はその紅い目を細めた。

「……確かに俺だけど…」

……あ、あん時の黒服っ！！」

やっと思い出したかの様に指差す。

いや、差すな。

「……で、何で俺がアンタ等と一緒に行かなきゃいけない訳？
俺は今からまだ仕事があるんだよ。

え？何？ナンパ？

あ、ごめん。そっちの趣味ねえんだわ俺。」

ごめんね〜等と色々言いながら猫を懷に優しく入れた。

え？懷！？等と思ったがまあいい。

「俺もねえわ！！」

何でてめー見たいな奴ナンパするかっ！！」

はあ、とため息をついた。

「とにかく、お前には辻斬りの件といい、聞きたい事が色々有るんだよ。」

「いや、俺は無いからいいわ。」

と、片手をあげる銀髪。

「てめーの意見なんざ聞いてねーんだよっ！お前には無くても俺等には有るんだよ！！」

有るんだよ使ったの何回目!？」

勝手にツッコミながら怒る。

「だからね、俺これからまだ仕事なの

ためー等に話す事なんざない。」

きっぱり言い切ると、また最初に飛び出してきた路地裏に、戻ろうとしていた。

「武装警察《真選組》。」

土方が男に向かって言い放った。

「……………」

男が振り返る。

「俺達は《真選組》だ。」

「一緒に来てもらおう。」

「……………」

男はその紅い目を細め、睨むかのように、じっと土方達を見ていた。

第六訓「真選組」(後書き)

最近暑くなってきたなあ(^O^)

第七話「取り調べ」(前書き)

かなり前に書いた小説なんで、文才今よりかなり無いですが…

(; ;)

短いですm (——) m

第七話「取り調べ」

武装警察真選組。

彼らは一人の侍を捕えた。

…

取調室に銀髪を入れ、あの猫は依頼主に引き渡した。

「まずは、名前を聞いておこうか」

土方が向かいに座って頼杖を付いている銀髪に言う。

「……………坂田銀時」

それだけをダルそうに、目は相手を見据えたまま、答える。

「職業は？」

「万事屋」

「歳は？」

「20手前」

「……………」

「……………」

やりにくううう！！！！

何なんだよこの天パ！！

むっちゃやりにくいんだけど!!

はあああ ∴ 本題に入るか。

「おまえは何者だ？」

「一般人」

「.....」

「.....」

一般人の訳ねーだろおおおがアアアア!!!!!!

会話が續かねえんだよ!!

一般人があんな辻斬りアツサリ倒せるかっての!!

はあああ
`、`

「何で、あの辻斬りが薬をやっているとわかった？」

「見りゃ分かる」

分かるわけねーだろおおおがアアアア!!!!!!

俺でも分からなかったのに!!
八つ当たりじゃないけど!!

つくそ、埒があかねえ。

「土方さん、どうなんでイ」

いきなり、取調室から栗毛の青年。

総悟だ。

「ああ？……ああ。」

「いや、返事だけじゃあ、分かんないっすよ」

そう言って、総悟は万事屋に目を向けた。

「髪が銀色だなんて、珍しいお人でさア

それに、辻斬りをああもアツサリやっちまうんだ。

「アンタ何者でイ」

「だから一般人。」

「てめー、いつまで言ってる」

さっきから質問攻めで飽きたのか、ため息をつく万事屋。

「……………」

俺が一般人じゃ無かったとしても、アンタ等には関係ねーだろ」

「……………」

その一言に、2人は黙る。

「手合わせ願っても良いですかイ？」

「はあ!!??」

「??」

突然総悟がきりだした。

「俺アこれでも真選組一でねエ

アンタと手合わせしたくなりましたぜ。

」

「何勝手に言ってんだ!!」

そんな土方を無視し、総悟は続ける。

「もちろん、俺に勝ったら、見逃してやってもいいでさア」

.

第七話「取り調べ」(後書き)

ほんつと短いなー(・・)ノ

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2588j/>

その出会いこそが始まりだった

2010年10月11日17時46分発行